エッセイ

すべてが軽くなる

浦野　裕司

私が教員研修の一環で一年間、大学の研究生として学生に交じって学んでいた頃のことだ。研究室で文献を調べていると、後ろから学生の声が聞こえた。

「ムサコデカテキョだから、お先に失礼します」

「ムサコデカテキョ？」

何を言っているのか分からず振りかえった私は、さっさとドアから出て行く彼女の背中を、呆然として眺めていた。

「ムサコデカテキョ、ムサコデカテキョ…、いったい何を言って出て行ったんだろう」

「外国語だろうか。鳥の声のようにも聞こえたが」

いくら考えても、まったく意味が思い浮かばない。残っていた学生に聞いてみればよいのだが、それもなんだか恥ずかしい。

「ムサコデカテキョ、ムサコデカテキョ」

そっと声に出してつぶやいてもみたが、見当がつかない。諦めて文献調べを再開したところ、学生どうしの会話が聞こえた。

「〇〇さん、ムサコの家庭教師、まだ続けてたんだね」

「今年いっぱいは続けるみたいだよ」

このやり取りで疑問は氷解した。

「ムサコは武蔵小金井で、カテキョは家庭教師か」

あれから二十年が過ぎた。「ムサコデカテキョ」に驚きかつあきれた私だが、言葉に関しては最近も、驚いたりあきれたりすることしきりである。

ＮＨＫの朝の番組。「おはスポ」だの「おはビズ」だのというコーナー名が、アナウンサーの口から発せられる。民放ならまだしも、ＮＨＫのアナウンサーにはこんな軽い言葉を発してほしくないというのが正直な気持ちだ。「おはようスポーツ」、「おはようビジネス」でいいじゃないかと思うのだが、テレビ番組の短縮形は増えるばかりだ。

テレビ番組どころか、教育現場でも短縮形が幅を利かせるようになっている。

「オリパラについては、関連する学習内容を…」

「そつアルの集合写真を撮るので…」

「そつオメの準備を各担当でよろしく…」

小学校の職員室で、現実にこんな言葉が飛び交っている。オリンピック・パラリンピックが「オリパラ」。ついカピパラを思い起こしてしまう。卒業アルバムが「そつアル」で、卒業おめでとう集会は「そつオメ」とは、なんとも軽すぎる。「ノンアル」や「カラオケ」ならともかく、ここに示したような言葉に、短縮形は似合わない。短縮形にした途端、中身そのものが軽んじられているように思えて仕方がないのだ。

軽んじられるだけならまだしも、短縮形の言葉で相手に混乱を与えてしまうこともある。関西方面の学校へ明日出張という日の夕刻、出張先から勤務校へ連絡が入った。電話を受けた職員が

「ちょうど夕方の打ち合わせ中だったので、あとでかけ直すよう伝えておきました」

と言うので、打ち合わせが終わってすぐに、こちらから電話をかけた。すると相手はびっくりした声で

「浦野先生、大変な時にすみません」

「えっ、大変て、何がですか」

「だって、先ほど電話したら、『今、誘拐で電話に出られないので、あとでかけ直すよう伝えます』って言われたんですよ。誘拐事件が起きたのでは、明日の出張なんてとても無理ですよね」

一瞬、なんのことか分からず言葉に詰まってしまったが、

「誘拐、誘拐」と考えているうちに思い当たった。

「あっ、驚かせてすみませんでした。うちの学校では、夕方の打ち合わせのことを『夕会』と言っているので、電話応対した者が『今、ゆうかいで』とお伝えしたのを勘違いされたのだと思います。だれも誘拐などされていませんのでご安心ください」

この時は笑い話で済んだが、短縮形の言葉を使うことで話題の対象が軽く扱われたり、重い誤ちに結びついたりしないかが心配である。すべてが軽くなったその先に、重たい未来が待っていなければよいのだが。